

仏陀観の展開

保 坂 玉 泉

仏陀の観念は質的に分けて現身仏と法身仏とし、量的に別けて一仏観と諸仏観とせられる。現身仏とはインド出現の歴史的人間的仏陀釈尊を指すもので、多くの仏伝資料の記録するところである。法身仏とは釈尊滅後に発った人間釈尊の理想的観仏で、小乗より大乘にかけて二身観、三身観、四身観乃至十身観が起った、所謂釈迦一仏の分身観である。一仏観とは釈迦一仏観の称で、諸仏観とは時間的三世諸仏観と空間的十方諸仏観とを合した所謂十方三世一切仏と総称するものこれである。

現身仏とは釈尊の色身に具えた多くの徳相の現実態で、釈尊は十号（仏説十号経）と身長丈六（仏説十二遊経）四八端巖の三十二相八十種好とを具えられた。後者丈六と三十二相は如来色身の現相なりとするも頗る理想化され前者十号は色身の徳相にして大別して一切智者としての法主の人格と仏弟子仏教徒に対する師主の人格とになる。如来、応供、正徧智、

明行足、善逝、世間解、無上士等は法主の徳、調御丈夫、天人師、仏、世尊等は師主の徳を表わしている。

これら現身仏の色身の当相は釈尊自身に於ては現実的であつたかもしれんが一般仏教徒から観ては頗る理想的なものであつた。故に釈尊の人格が高ければ高い程、理想的表現が盛になつた。結局仏陀の高遠なる人格と教法に対する讚歎渴仰から各種の理想的仏陀観が起つた。

譬喩的仏陀観。種々美しい譬喩を以て仏陀の徳相を表現したもの、日月光明喩（長阿含卷一大本経、卷二遊行経等）、蓮華喩（同上、金光明経讚歎品等）、医喩（増一阿含卷四十六旋羅経、仏遺教経等）、船師喩（長阿含遊行経、無量義経等）、其他満月喩、金山喩、象王喩、獅子王喩等々がある。

神話的仏陀観。人間仏陀の偉大なる徳相を表現するにインド民族の古来の神の観念と優劣比較した。太陽神話、日月光明喩を以て仏陀の人格を表現して光彩陸離たるものあり（中

阿含卷六教化病經、同卷四波羅牢經、増一阿含卷二十二等）、
 仏人仏教学者セナール氏をして釈迦仏の古伝説は太陽神話の
 発展変化なりと誤解せしめた。三十二相、仏陀の三十二相は
 頗る変態的で人間仏陀の真相に非ず、元、輪王の三十二大人
 相を仏陀に移植したもの（仏本行集經卷九相師占看品、方広大
 莊嚴經卷三、大智度論卷四）、釈尊の説法を転法輪と称するこ
 とも輪王の転宝輪から借り来ったものである。梵天勸請（四
 分律卷三十二）、梵天帝釈天が仏陀の説法を聴き又仏身を尊
 重する等の表現記録は仏陀を神以上に位せしめ、遂に人間仏
 陀と天神と混同表現するようになった。

本生的仏陀觀、釈尊が成仏以前過去宿世数代に菩薩として
 種々変化身を以て六度を行じその因縁功德によりて今世成仏
 することが出来たという童話風の物語に現われた仏陀觀で、
 この物語は釈尊の説法の一形式で、南北両伝の仏教に共に伝
 えられ、就中、「六度集經」中の「須大拏那經」はその雄篇で
 ある。

先の譬喩的仏陀觀と神話的仏陀觀は釈尊の人格を空間的に
 横に拡大し、後の本生的仏陀觀は時間的縦に延長し共に現実
 的仏陀を理想的に表現描写したことになる。

形而上的仏陀觀（法身仏）、仏陀の入滅を契機として有限な
 る仏陀の色身の上に無限なる法身實在の要求が起った。諸行

無常の理から如来色身の滅することは当然なりとするも、仏
 弟子思慕の情操から入滅の如来を永遠不滅ならしめんとする要
 求と、死後如来有りや無しや、有りとすればそれはどんな形
 であるかとの理智的疑問とが仏弟子の間に起って、如来法身
 常在不滅の思想が仏滅後に盛行した。而して法觀念の発達に
 より法身觀に種々なる相異が起った。

教法法身觀、法とは説法教法の義で、如来の涅槃は色身入
 滅するも仏所説の教法は永遠不滅なり、従って滅後の仏弟子
 の皈依処は教法これなりとす、（雜阿含二十三・四、長阿含遊
 行經）。「雜阿含」二十四には「名句味身」といい、「増一阿
 含」四十四には「我が釈迦文仏は壽命極長なり、然る所以は
 肉身滅度を取ると雖も法身此に存す」とあり、「仏遺教經」に
 は「自今已後我が諸の弟子展転して之を行ぜは如来の法身常
 に在して而も滅せざるなり」とある。仏滅直後から六七百年
 間四五回に亘り三蔵の結集が行われたのは令法久住法身常在
 のための仏弟子の最大行事であった。

尚、仏陀の遺物を保持永存し、遺身舍利を追慕崇拜して卒
 塔婆を建て、竟に仏教芸術を創造したのは、主在家信徒の
 如来法身永遠不滅の運動に発祥したものであった。

五分法身説、戒身、定身、慧身、解脱身、解脱知見身を合
 称した。いずれも仏陀の色身上に体験した行の徳目の集積を
 指し、仏在世にも既に行われた思想で諸経論に散見するが、

特に小乗教の主とする法身観であった。「大乘義章」二十本には五分法身は「徳の聚積なれば亦名けて身となす」とあり、「華嚴五教章」下巻「に娑婆等に依れば菩薩成仏して二身あり、一には法身、二には生身なり、法身とは謂く戒等の五分なり」といい、娑婆等の毘曇系の法身を五分法身と見、「成実論」も「仏は五品を具足す」といい、小乗は共に五分法身説を仏身観とした。

尚、小乗部派中、上座部は仏身有漏説、伏惑行因論を主張し、四階成仏説に於て生身は第二階に修得し、法身は四階通修なりとし、大衆部は仏身無漏説、断惑行因論を主張し、「如来の色身は実に辺際なし、如来の威力も亦辺際なし、諸仏の寿量も亦辺際なし」といい(異部宗輪論及同述記取意)、大乘の報身思想の先驅をなした。「異部宗輪論述記」に「此部(大衆部)の説かく仏は多劫を経て報身円極の法身を修得し、辺際あること無し、所見の丈六は実の仏身に非ず、機に随って化するが故に」というて、大衆部の仏身説が大乘の三身説に接近していることを認めている。

かくして五分法身は如来永遠不滅の法身であるが、独り如来に限らず、仏道の行者にも等しく修得出来る法身なりとする法身普遍性を法身常在説に加えるようになった。

真如法身説、真如の理を如来の法身と観るもので、如来の十号の如来、正徧智、善逝、仏の如きは智法身といふべくば、

其対象たる真如を理法身といふべし、前記五分法身が智法身なるに對し理法身として真如法身を説くに至った。前者は小乗の法身説であるが後者は大乘の法身説である。「法華」の如是実相、「涅槃經」の仏性、「如来藏經」「勝鬘經」「楞伽經」等の如来藏、「起信論」の如来藏真如に依る法身説をば總じて真如法身説という。

真如思想の源流は遠く仏陀所証の正法、一乗道、古仙道、縁起法などに見出され、「雜阿含」十二に古仙人の道を縁起法なりとし、「縁起の法は我が作る所に非ず、亦余人の作るに非ず、然も彼の如来の出世及未出世にも法界に常住す」とあり、同四十四には法界常住の真理を正法、一乗道といい三世諸仏の所依なりとし、「増一阿含」序品には「法に於て当に念ずべきが故に、如来は是に由つて生じ、法興つて正覚を成ず」とあり、小乗經にも真如法身説の萌芽や前提思想が沢山あった。大乘經典に至つて真如思想は数段と飛躍した。「北本涅槃經」三に「如来は是れ常住法なり変易せざる法なり」、「南本涅槃經」三に同様の文を出だし、更に「如来の身は即ち金剛身なり(中略)如来身は即ち是れ法身なり」といい如来を常住なる法身と写象す、茲にいう如来とは真如と同義である。尚、「涅槃經」に如来、真如を仏性と名づけ、一切衆生に常住悉有(普遍)なりと表現したことは有名である。

遠く小乗諸經と近く大乘諸經の真如思想を受けて大乘の真

如法身説が成立した。その整然たる組織哲学書は「大乘起信論」であつて、後世の思想界に影響を与えた。

尚、真如法身の理法身と智法身とに対し、夫々本覺と始覺とに分觀せられた。「金光明經」は理法身を如とし智法身を如。如智といひ、「起信論」は理法身を本覺と稱し、智法身を始覺と表現した。唯識宗は智(事)法身に傾き、華天兩宗は理智二法身を採り、禪は理法身を専らにした。

法界法身説、仏教の世界觀を直に移して仏陀觀としたものが法界法身説である、所謂汎神的仏陀觀、統一的仏陀觀と稱せられるもので、先の真如性起の全法界を即仏法身なりと觀るものに外ならぬ。華嚴宗の重々無尽縁起の法界即ち毘盧舍那仏身なりとするものと密教の六大縁起の金胎兩部の曼荼羅界を直に毘盧遮那仏なりとするものとの二流が法界法身説を代表する。「華嚴經」三十八には解境の十仏と行境の十仏との二種を挙げ、同五十三には行境の十仏を出し、これら十仏を統攝せる全法界を一仏法身とし、之を大方広仏とも毘盧舍那とも名ずける。密教では胎藏界曼荼羅に四百十四尊、金剛界曼荼羅に一千四百六十一尊を筭し、兩部合体して一大日如来毘盧遮那仏に皈する。

道元禪師が「正法眼蔵」如来全身の卷に「三千大千世界は如来全身なり」、三界唯心の卷に「三界唯心は全如来の全現成なり」、古仏心の卷に「九山八海は古仏の日月月仏なり古

仏の皮肉骨髓なり」などといわれたのは華嚴の法界觀に基き人間の如来釈迦牟尼一仏に統合皈一せられた独自の法界法身觀である。

現身仏と法身仏との質的仏陀觀は二身觀、三身觀、四身五身乃至十身觀に展開した。二身觀は前弁せる如く現身仏色身の外に法身を加上したもので、「婆娑論」三十一には法身と生身との二身を出だし、上座毘曇これを繼承し(村上專精仏陀論)、大衆部も生身以外に実身を認め(異部宗輪論述記)、「大智度論九には法性身、父母所生身、同二十九・三十一には生身と法身との二身を説いている。小乗と初期大乘は仏二身説を持していた。

此の二身の中、法身の觀念が分析されて理法身と智法身、理法身と事法身の二身が考えられ前者は法身、後者は報身と稱し、生身色身は応身と名づけられ、茲に三身説が成立した。三身を説くものは「金光明經」一・三身品の化身応身法身、「解深密經」五の法身解脱身化身であるが、此二經が三身説の二大源流となつて、前者は「十地經論」三、「金剛般若波羅蜜經論」上、「法華玄論」九、「起信論」などの系統をなして華天兩宗の三身説をなし、後者は自性、受用、變化の三身説を引き、「仏地經」「仏地經論」七、「攝大乘論」下、「成唯識論」十などと連綿して唯識系諸宗の仏身論を形成した。

次に報身に自受用、他受用の二身が分たれ、応身も勝応身、劣応身の二身に別けられ、四身、五身乃至十身の多身が觀ぜられ、かくして質的仏身觀は一仏多身説を最高頂として発達をとげた。

諸仏觀に時間的三世仏と空間的十方仏との二種の思想がある。

三世諸仏を出したものは「雜阿含」四十四、「長阿含」十二自歡喜經、同一大本經で、同三遊行經中には過去毘婆尸仏を出し、同六轉輪王修行經には未來仏弥勒如来を出した。殊に過去七仏を委説した大本經には過去七仏各々に就て出現の時期、出現時の人壽、仏の種姓、樹下成道、説會、仏弟子、執事弟子、仏子、父母及その都城の事を明記し、更に毘婆尸仏出現の相に就て兜率降生、右脇入胎出胎、降生時大地震動、樹下降生、安行七步、二泉涌出灌沐、相師觀相、三十二相具足、輪王と仏陀との予言、四門出遊、踰城出家、十二因縁順逆兩觀成道、梵天勸請説法、鹿野苑最初説法、四諦法輪、六年還城説戒等実に委しく記してある。此の如き記事は釈迦仏の八相成道の事蹟に模し釈迦伝を過去仏に移植したことは明かである。尸棄仏に就ても同巧異曲である。従つて過去仏の事蹟は、釈迦仏八相成道伝が纏つてから書記されたものであるから、釈尊自身の説ではない。然らば釈尊には過去仏の信

仰ありしや否や、釈尊が還郷時の乞食行を過去仏の行なりとし、七仏通誠偈の「是諸仏教」の諸仏とは過去諸仏を指し、又古仙道、正法、一乗道などは過去仏の教なりと信ぜられた。「雜阿含」四十四には「謂はく一乗道あり……過去……当来……諸世尊あり、現世尊の正覚は此に乗じて海流を渡る」又「過去等正覚及未來の諸仏、現在の仏世尊は……正法に依つて住す、……是れ則ち諸仏の法なり」とあり。釈迦仏には過去仏の伝灯者たる信仰のあつたことは疑いない。

過去七仏というも三世諸仏というも、いずれも壽命長遠なりとするも色身仏なれば生死入滅を免れず、過去仏は既に入滅して現在にあらず、未來仏も未だ降生せず、故に時間的三世諸仏の思想は結局一世界一仏思想で同時に二仏併存せずと説く、「長阿含」自歡喜經には「過去の三耶三仏は我れと等しく未來の三耶三仏は我れと等し、現在に二仏の出世あらしめんと欲するも此の処こゝあることなし」と云い、同四典尊經にも「我れ仏より聞き仏より受く、一時に二仏出世せしめんと欲するも此の処あることなし」「中阿含」四十七多界經にも「阿難よ、若し世中二の轉輪王並び治するものあらば終に是の処無し……若し世中二如来有らば終に是の処無し、若し世中一如来有らば必ず是の処有り」とあり、所謂天に二日なく地に二王なしという思想に比して地に二仏同時併存せざることを述べ、「瑜伽論」三十八にも一世界二仏同時出世せざることを

述べている。故に原始仏教、小乗仏教及び初期大乘の諸仏思想は三世仏思想で現在唯一仏二仏多仏不併存の考であった。過去七仏を伝燈相承の仏と信ぜられた道元禪師は「過去現在未来の諸仏ともに仏となるときはかならず釈迦牟尼仏となるなり」（即心是仏）と宣へ三世一貫の現在釈迦唯一仏を皈依の対象とせられた。

十方諸仏同時併存の論拠として「大智度論」卷四、卷九に委し、卷四に「摩訶衍論の中の種々の因縁は三世十方の仏を説く、何となれば、十方世界には老病死姪怒癡等あり、是を以ての故に仏は出でたまうべし、……復次に病人多ければ応に多くの薬師あるべし」といい、三世仏と共に十方仏の存在を明かし、小乗にも十方仏の存在を説けりとして「長阿含」中の毘沙門の偈「去来現在の諸仏に稽首したてまつる云云」の文を出し、現在の諸仏の言を十方仏同存の義に解し、小乗の一三千世界に対し大乘は他（亦多）三千世界を認め、世界無辺衆生無尽の故に之等の救済者たる仏も亦た無量にして同時出現併存すると論じ、「大論」第九巻にも同様の論述をなし、一世界二仏なしと説くは未了義經の方便説なりと会通している。

大乘は四弘誓願文の如く世界無限衆生無辺なれば仏無辺、従て十方仏同時併存をなし、小乗と大乘とは世界觀の相異か

ら仏陀觀の異見が生じた。

十方仏同存を説いた代表的經典は「法華經」「涅槃經」であることは勿論である。前者は授記作仏によりて声聞も悪人提婆も七歳の童女も一切皆成仏すと説き、「涅槃經」は「一切衆生悉有仏性」を高唱して一切皆成仏の根拠をなした。

斯くして大乘に於ては三千仏名經の如く過去千仏、現在千仏を数えるに至り仏界の賑いを呈露した。

禪宗一般の仏陀觀は大乘の仏陀觀が完成した上に発生したものであるから、大に大乘の一仏三身説、三世十方仏觀に測っているが、禪宗の栄えた支那及支那人によって特異の考でインド仏教と変った表現がなされている。但し仏陀觀の問題は禪宗師学の間にて於いて断然多く問答され、禪宗徒の一番の関心事であったようだ。一般禪の仏陀觀は資料的に分けて相對的仏陀觀と絶對的仏陀觀として取扱う。

相對的仏陀觀、仏なるものを分身的相對的に觀るもの、法報応三身中の法身に該当する。有人が徳山に「如何なるか是れ仏」と問うたのに答えて「仏は是れ西天の老比丘」又曰く「乾屎橛」（会元卷七）。同問に対し雲門にも同じく「乾屎橛」（会元卷十五）の語がある。以下「如何なるか是れ仏」の問に対する禪門諸師の答話を列挙して見よう。

雲門对雪峰曰「屎語甚麼をか作す」（会元七）

有人对慧省曰「猫児露柱に上る」(会元五)

有人对道詮曰「雪の消後を待ち得て自然に春到来す」(会元八)

有人对首山省念曰「新婦驢に騎れば阿家牽く」(会元十一、従容録

六十五則)

玄则对青林曰「丙丁童子来って火を求む」(眼蔵・弁道話)

慧超对法眼曰「汝は是れ慧超」(碧巖七則)

有人对洞山曰「麻三斤」(碧巖十二則)

「僧、雲門に問う如何なるか是れ清浄法身、門云く花葉欄」(碧

岩三十九則)

「僧、雲門に問う如何なるか是れ法身、門云く六不收」(碧岩四

十七則)

「僧、大竜に問う、色身敗壞す如何なるか是れ堅固法身、竜云く

山花開いて錦に似たり澗水湛えて藍の如し」(碧岩八十二則)

「曹山、徳上座に問う、仏の真法身は猶おし虚空の如く、物に応

じて形を現すること水中の月の如し、作麼生か箇の応する底の道

理を説かん、徳云く、驢の井を観るが如し」(従容録五十二則)

蘇東坡居士云く「溪声は便ち是れ広長舌、山色豈清浄身ならさら

んや」(眼蔵・溪声山色)

従上諸禪師の仏身観は、人物色心を仏と観た法報応三身中の法身を指していること明かである。

絶対的仏陀観、仏なるものを全世界の総該的全法身と見るもの。以下諸経録に出ずる諸師の仏陀観の代表的なものを挙げる。

「一切諸仏身は唯だ是れ一法身なり」(六十華嚴経卷五菩薩明難品)

「真如自性はれ仏」(六祖壇経付嘱章)

「本源自性天真仏」(証道歌)

「恒沙の諸仏、体皆同じ」(証道歌)

「報化は真仏に非ず、亦説法者に非ず」(伝心法要)

「此心是れ本源清浄仏なり、人皆之れ有り、蠢動含靈と諸仏菩薩

と一体にして異らず」(同上)

「万類之中、箇々是れ仏なり、譬えば一団の水銀諸処に分散する

も顆々皆団なるが如し」

「即心是仏、上諸仏より下蠢動含靈に至るまで皆仏性にして同一

心体なり」(同上)

「此一心法の体尽虚空徧法界、名けて諸仏と為す」(同上)

いずれも符節を合する如く法界法身を仏陀の全身と観たも

ので、「華嚴経」の「三界唯一心、心仏及衆生是三無差別」の

法界即毘盧舎那観と毫も交りはない。

かくして禪の仏陀観は真如法身観と法界法身観とを併せ伝

承したものであるということが証明せられる。

尚、此絶対的仏身には多方面の徳相を具えている、且らく

十種に分別して見よう。

一、本有の徳

「本源自性天真仏」(証道歌)

「此心是れ本源清浄仏」(伝心法要)

二、最高の徳

「仏の境界は不可思議なり、心識の及ぶべきにあらず」（眼蔵・

弁道話）

「九山八海是れ古仏の日面月面なり、古仏の皮肉骨髓なり」（眼

蔵・古仏心）

三、中心の徳

「万物ともに仏身を使用す」（弁道話）

「いはゆる世界は十方みな仏世界なり、非仏世界いまだあらざるなり」（古仏心）

四、靈源の徳

「群靈の本源仮りに名ずけて仏と為す」（楊岐山甄叔・大慧宗杲）

五、普遍の徳

「仏の眞法身は猶おし虚空の如し」（伝心法要）

「仏祖の光明は尽十方界なり」（眼蔵・光明）

「人身ははかりつべし、仏身はつひにはかるべからず」（眼蔵・袈裟功徳）

「この三千大千世界は如来全身なり」（眼蔵・如来全身）

六、永恒の徳

「いはゆる仏心はこれ三世なり、心と三世とあひへだたること毫釐もあらず」（眼蔵後心不可得）

七、大智の徳

「經卷はこれ如来舍利なり、如来全身なり」（眼蔵・如来全身）

八、慈悲の徳

「如来神力慈悲力寿命長遠力、よく心を拈じて信解せしめ、身を

拈じて信解せしめ、尽界を拈じて信解せしむ」（眼蔵・見仏）

九、造化の徳

「群靈の本源仮りに名ずけて仏と為す、一源の中、無量無辺不可

説不可説の差別異旨、能巻能舒、万物を造化す」（大慧宗杲）

「三界唯心は全如来の全現成なり」（眼蔵・三界唯心）

一〇、総該万有の徳

「神光独り耀く、（中略）独り輝くと言うは、乃至一体無一なり、神か、光か、天に在っては天に同じ、地に在っては地に同ず、虚に万象を含み、洞に十方を貫く、（中略）神光は天生に非ず、地湧に非ず、内出に非ず、外来に非ず、造化之れに依って転旋し、物象之れに由って生植す、能く一切を成就して、而かも一切の能く成就せざるものは神光なり」（中峯明本）

右十徳は禅の絶対的仏身をよく全一的に叙述したものである。従て禅の仏陀観は時間的三世諸仏觀と空間的十方諸仏觀との後に、それらの仏陀観を基盤として起ったもので汎神的一の的に觀説している。此の仏身觀を禅家一般は即心是仏、或は即心即仏と名ずけた。

道元禪師は「正法眼蔵」に即心是仏の卷を撰して即心是仏の眞意を明かにした。（一）先ず「即心是仏」は西天になく震旦にはじめて聞けりとし、（二）衆生の慮知念覺の未發菩提心を即仏とする癡人の迷想を斥け、（三）西天竺國の先尼外道の靈知本

性の心常身滅の謬見を正し、(四)即心の心を説いて「いはゆる正伝しきたれる心といふは、一心一切法一切法一心なり」というて三界唯心の心なりとし、(五)此心は行により修証するを要すとし「即心是仏とは発心、修行、菩提、涅槃の諸仏なり、いまだ発心修行菩提涅槃せざるは即心是仏にあらず」と実在心を修得心に皈し、(六)従つて即とは時間上の頓速頓悟の義にあらずとして、「たとひ一刹那に発心修証するも即心是仏なり、たとひ一極微中に発心修証するも即心是仏なり、たとひ無量劫に発心修証するも即心是仏なり、たとひ一念中に発心修証するも即心是仏なり、たとひ半拳裏に発心修証するも即心是仏なり、しかあるを長劫に修行作仏するは即心是仏にあらずといふは、即心是仏をいまだみざるなり、いまだ学せざるなり、即心是仏を開演する正師をみざるなり」というて即

心是仏とは時劫の長短にかかわらず人間本具の本心が修証に依りて成仏すと明示し、(七)結局人間の如来釈迦牟尼仏は発心修行菩提涅槃の即心是仏なり三世諸仏の統一伝承の仏なりとし、「いはゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏これ即心是仏なり、過去現在未来の諸仏ともにほとけとなるときは、かならず釈迦牟尼仏となるなり、これ即心是仏なり」と結ばれた。

之を要するに、道元禪師は禪宗一般の汎神的渾一的仏陀を却退一步し、統一的人間の現身仏に復古改新し信仏を現成せしめられた。原始仏陀観と発達の仏陀観との融会をなしたとも言える。(完)

昭和三十七年六月十二日稿